

世界文学全集 別巻 7

レ マ ル ク
凱 旋 門

山西英一 訳

河 出 書 房

世界文学全集 別巻Ⅶ レマルク



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和35年10月10日 初版発行
昭和44年11月20日 27版発行

定価 430円

訳者 山西英一
発行者 中島隆之
印刷者 多田基
装幀 原 弘

印刷・多田印刷株式会社
製本・株式会社若林製本工場

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0397—310207—0961

目 次

凱旋門……………一

年譜……………四七

解説……………(訳者) 一

凱
旋
門

主要人物

ラヴィック 本編の主人公。ベルリンの大病院の有名な外科部長であつたが、友人の逃亡を助けたため、ゲベウに逮捕され、ハーケの残忍な拷問をうける。のち強制収容所を脱走して、フランスに不法入国、幽霊外科医として、もぐりの宿オテル・アンテルナシヨナルに不安な生活をおくっている。

ジョアン・マザー 天涯孤独の歌い手で、端役の女優。純真誠実な魂と肉体の彷徨とのもだえに引き裂かれてゐる女。ラヴィックと絶望的な恋におちいる。

ボリス・モロソフ 帝政時代の士官。いまはナイトクラブ・シエーラザードのドアマン。ラヴィックの親友。ハーケ・ゲベウの役人。ラヴィックの愛人を拷問して殺す。スパイとして、ときどきパリへくる。

ケート・ヘグシュトリーム アメリカ国籍の上流社交界の美しい婦人。ラヴィックをひそかに愛している。

ヴェーベル博士 パリの私立病院長、ラヴィックの友人。ウーゼニー・ヴェーベル博士の病院の看護婦長。

アンドレ・デュラン 富裕なパリの私立病院長。無能な外科医であるが、巧みな社交術で上流階級に取り入

り、幽霊外科医を利用して、巨万の富をつくる。

ルヴァル パリ警視庁の長官。デュランに代わつたラヴィックに胆嚢の手術をうけるが、彼はそれをしらず、ラヴィックを国外に追放する。

ローランド 女郎屋の女中頭で、淫売婦の監督。マダム・ブーシェ 墮胎専門のもぐり。

リシエンヌ・マルチネ 二十一歳の美しい娘。ボボという与太者の恋人がある。マダム・ブーシェの手にかかつて瀕死のところを、ラヴィックに救われる。

ジャンノー 母親とふたり暮らしの貧しい、けなげな少年。自動車に足をひかれ、ラヴィックの切断手術をうける。ラヴィックを敬慕している。

ゴールドベルグ オテル・アンテルナシヨナルに止宿中のドイツ避難民。アメリカへの査証をもとめて、アメリカ大使館へ日参している男。

ウィーゼンホフ オテル・アンテルナシヨナルに止宿中のドイツ避難民。ゴールドベルグの妻と密通。

エルンスト・ザイデンバウム オテル・アンテルナシヨナルに止宿中のドイツ亡命者。言語・哲学博士。

一

女は、斜^{しか}いに、ラヴィックのほうへ近づいてきた。早足にあるいていたが、妙なふうによるめいていた。ラヴィックは、女がすぐそばまでやってきたとき、はじめて女に気づいた。みると、頬^ほ骨の高い、目と目の間のひろい、青ざめた顔をしていた。その顔はこわばって、まるでマスクでもかむったようで、げっそりこけているようにみえた。彼は女の目が街燈の光をうけて、ガラスみたいにひどくうつろな表情をしているのに気づいた。

女はからだに触れるほどすれすれに、彼のわきを通りぬけた。ラヴィックは片手をのばして、女の腕をつかもうとした。とたんに、女はよろよろとよろめいた。もし彼がつかまえてやらなかったら、倒れてしまったろう。

彼は、女の腕をしっかりとつかまえた。「どこへいくんです？」ちょっとしてから、彼はたずねた。

女は大きく目をみひらいて、じっと彼をみつめた。

「放してください！」女はささやくようにいった。

ラヴィックは返事をせずに、なおも女の腕をつかんでいた。

「放してください！ どうなさるんです？」女は、ほとんどくちびるも動かさずにいった。

ラヴィックは、女が自分をちっともみていないような気がした。女は彼をすかして、どこかうつろの夜の闇^{くろ}をみている。女にとって彼は、なにか自分をひきとめたものの、なにか自分が話しかけているものにすぎなかった。「放してください！」

商売女でないことは、すぐわかった。酒に酔ってもいなかった。彼はもう、女の腕をそんなに強くつかんではいなかった。振り放そうと思えば、らくにふり放すこともできた。しかし、女はそれに気がつかなかった。ラヴィックはしばらく待っていた。それから、「いったいどこへいくんです？ 夜、ひとりで、パリの街^{まち}をいま時分？」と、もう一ど静かにいって、腕を放した。

女は黙っていた。でも、先へはいかなかった。いったんひきとめられると、もう二どとあるきだすことができないように。

ラヴィックは橋の欄干^{らんかん}によりかかった。手の下に、しっとり湿った、ざらざらした石の肌^{はだ}が感じられた。「きつとあそこだね？」彼は頭をうしろへふりむけて、下のほうを指さした。そこには、セーヌ川が灰色の光をちら

ちらうつしながら、ボン・ド・ラルマの橋かげのほうへ、休みなく、ゆっくり流れていた。

女は返事をしなかった。

「早すぎますよ」と、ラヴィックはいった。「十一月じや早すぎますよ。そうして、とても冷たいですよ」

彼はタバコの包みを取りだして、ポケットの中のマツチをまさぐった。小さなマツチ箱の中には、棒が二本しかのこっていなかった。彼は用心しながら、からだをかかめ、両手でマツチの火をかこって、川面から吹いてくるかすかな風に消えないようにした。

「わたしにもタバコを一本くださいませんか？」女は抑揚のない声でいった。

ラヴィックは、からだをおこして、タバコの包みを女にみせた。「アルジェリアですよ。外人部隊の黒タバコです。きつとあんたには強すぎるだろう。ほかのをもってないんでね」

女は頭をふって、一本とった。ラヴィックはマツチの火をさした。女はせかせかと、深くすった。ラヴィックは、マツチの棒を欄干から放りなげた。マツチはちよつと小さな流れ星みたいに、闇の中を落ちていって、水面にとどいて、消えた。

タクシーが一台、橋の上をゆっくりやってきた。運転手は車をとめた。こちらをみて、ちよつと待っていた

が、やがてアクセルを踏むと、しつとりぬれて、黒く光っている、ジョルジュ五世通りを走っていった。

ラヴィックは、急に疲れをおぼえた。一日じゅう忙しい仕事をしつづけで、眠るひまがなかった。それで、酒を飲みにもう一ど出てきたところだった。ところが、こうして夜ふけのしつとりした冷たい空気に触れてみると、またぞろ頭に大きな袋でもかむったように、疲れが出てきた。

彼は女をみた。いったいおれはなんだってこの女をひきとめたりなんかしたんだろう？ この女はどうかしている。それは明らかだ。しかし、それがおれにどうだっているんだ？ どうかしている女なんか、いままでいくらでもみている。ことに夜、パリの街においておやだ。そんなことはいまはどうだっていい。ただ望むらくは、二、三時間の睡眠をとることだ。

「うちへかえりませんか？」と、彼はいった。「いったいま時分、街になんの用があるんです？ せいぜいやな思いをするぐらいがおちですよ」

彼は外套の襟をおこして、立ち去ろうとした。女は彼のいうことがわからないように、ラヴィックをみていた。そして、「うちへ？」とくりかえした。

ラヴィックは、肩をすぼめた。「うちだろうと、住居だろうと、ホテルだろうと、なんだらうと、あんたの好

きなようにいったらいいでしょう。とにかく、どこかへです。まさか警官につかまりたいわけじゃないでしょうからね」

「ホテルへ！　とんでもないわ！」と、女はいった。

ラヴィックは立ち去りかねた。この女もまた、どこへいったいいかわからぬ人間なんだな、と彼は思った。それくらいのはじめからわかっていたはずだ。いつだって、おんなじ手だ。この連中は、夜はどこへいったいいかわからない。ところが、翌朝になってみると、こつちがまだ眠ってる間に、どこかへすつと消えていってしまう。朝になると、どこへいったらいいかわかるのだ。夜とともにおとずれては、夜とともに去っていく、いつもながらの安っぽい暗闇の絶望だ。彼は吸いさしのタバコを放り投げた。そんなことは、この自分だって、いやっていうほど知っているんだ！

「まあ、きなさい。いっしょにどこかでもう一杯やりましょう」と、彼はいった。

それが一ばんかんたんだった。そうしておいて、勘定をはらって失敬すりゃいい。女は、どうしたらいいかわからない自分であるだろう。

女はふらふらとあるきだしたが、つまずいた。ラヴィックは女の腕をつかんだ。「疲れたの？」と彼は聞いた。「わかりませんわ。そうだと思うの」

「疲れすぎて、眠れないんだろう？」

女はうなずいた。

「よくあるやつだ。まあ、きなさい。手をとってあげよう」

ふたりはマルソー通りをあるいていった。ラヴィックは、女が自分によりかかるのを感じた。それは疲れたようなよりかかり方ではなかった——まるで落ちかかって、何かにすがって身をささえなくてはならぬかのように、よりかかった。

ふたりはピエール・プロシエール・ド・セルビエ通りをよこぎった。シエーヨー街の交差点のむこうに通りがひらけていて、はるかかなたに、凱旋門の巨大な姿が雨模様のを背景にして、ゆらめきながら黒々とあらわれた。

ラヴィックは地下室へおりる、あかりのついた狭い入り口をさした。「ここですよ——きつとまだ何かあるだろう」

それは自動車の運転手たちの飲み屋^{ビストロ}だった。中にはタクシートの運転手がふたり、淫売婦^{いんばいど}がふたり腰かけていた。運転手たちはトランプをやっていた。淫売婦たちはアプサン酒をのんでいた。そして、ちらちらと女を探るようにみた。それから、冷やかにそっぽを向いた。年上

の淫売婦は、大きな声を出してあくびをした。もうひとりの淫売婦は、物臭そうに顔の化粧をはじめた。奥のほうでは、無精なネズミみたいな顔つきをした給仕がひとり、床におがくずをまいて、部屋の掃除をはじめた。ラヴィックは女といっしょに、入り口に近いテーブルに腰をおろした。そのほうが便利だった。急いで逃げだすことができるからである。彼は外套を脱ぎもしなかった。「きみは何にしますか？」と、彼はたずねた。

「わたし、わかりませんわ。なんでもいいの」

「カルヴァドスを二つ」ラヴィックはチョッキを着て、シャツの袖をおり返している給仕にいった。「それから、チェスターフィールドを一つ」

「ありませんよ」と、給仕はいった。「フランスタバコだけです」

「じゃ、いい、緑のローランをくれ」

「緑もないんです。青しかありませんが」

ラヴィックは給仕の二の腕をみた。そこには、雲の上をあるいている裸体の女が彫ってあった。給仕は彼がみているのに気づいて、拳を握りしめて、力こぶをつくってみせた。女は腹をみだらなふうにくねらせた。

「じゃ、青だ」と、ラヴィックはいった。

給仕はにやっと笑った。「もしかすると、まだ緑が一つくらいのことてるかもしれませんよ」彼はそういっ

て、スリッパをひきずりながら、はいっていった。

ラヴィックは、そのうしろ姿をみおくれた。「赤いスリッパに腹をくねらせる踊り子か！ きつとトルコ海軍にでもいたんだろう」

女は両手をテーブルの上においた。もう二どともちあげるのはいやだというようだった。手は手入れがしてあった。といっても、たいしたことはなかった。あまりよく手入れがしてあるわけではなかったから。ラヴィックは、右手の中指の爪が裂けているのに気づいた。きつと切りとったまま、ヤスリでみがいてもいないのだ。ラックが剥げおちているところもあった。

給仕はグラスとタバコをもってきた。

「緑のローランですよ。一つみつかりましたから」

「そうだろうと思っていたよ。きみは海軍にいたのかね？」

「いいえ。サーカスでさあ」

「それならまだましだよ」ラヴィックは女にグラスをさしだした。「さあ飲みたまえ。いま時分は、これが一ばんいい。それとも、コーヒーにしますか？」

「いいえ」

「一息にぐっと飲みたまえ」

女はうなずいて、グラスを飲みほした。ラヴィックは女をじっとみた。女は血色のない、青ざめた、ほとんど

無表情な顔をしていた。くちびるはふっくらしていたが、しかし、青ざめていた。輪郭はぼやけてみえた、ただ髪だけがつやつやした、生まれながらの金髪で、非常に美しかった。ベレー帽をかぶり、雨外套の下には、仕立て作りの服を着ていた。服の仕立てはりっぱだった。指にはめた指輪の緑の石はあまり大きすぎて、擬い物としかみえなかった。

「もう一つどう？」と、ラヴィックは聞いた。

彼女はうなずいた。

彼は給仕に合図した。「カルヴァドスをもう二つ。大きいのにしてくれ」

「大きいので？ いっぱい注いで？」

「そうだ」

「すると、カルヴァドスのダブルを二つというわけですね？」

「そのとおり」

ラヴィックはさつさと飲んで、それからひきあげようと吐をきめた。退屈だったし、それにすっかり疲れていた。普通だったら、彼はひよっこりぶつかる偶然事には辛抱強かった。いままで、波瀾に富んだ四十年の生活をしてきていた。だが、今夜のようなことは、もうさんざんみあきしている。パリ生活を何年かして、夜はほとんど眠れない。したがって、その間には、いろんなこと

にぶつつかるわけだ。

給仕はカルヴァドスのグラスを運んできた。ラヴィックはツーンと芳しいかおりを発するりんご酒をとって、そつと女のまえにおいた。「こいつも飲みたまえ。たいして利き目はないが、しかしあったまりますよ。それから、どんなことにしろ——あんまり大げさに考えないことだね。たいいていのことは、そのうちにはなんでもなくなってしまうんだから」

女は彼をみた。が、りんご酒のグラスは手にとらなかつた。

「そういうものなんだ」と、ラヴィックはいった。「こゝとに夜はね。夜というやつは、なんでも誇張してしまうものですよ」

女はなおも彼をみつめていた。それから、「わたし、慰めていただかなくともいいの」といった。

「じゃ、なおさらけっこうだ」

ラヴィックは給仕のほうをみた。もうたくさんだ。こういうタイプの女は、ざらにある。きつとロシア人の女かなんかだろう。どこかに腰をおろしたと思うと、まだぬれた服もかわかぬうちに、もうえらそうなことをいう。

「きみはロシア人ですか？」と、彼は聞いた。
「いいえ」

ラヴィックは勘定をはらい、立ちあがって、別れを告げようとした。すると、女もいっしょに立ちあがった。何もいわずに、わかりきったことのように。ラヴィックはどっちとも決しかねて、女をみた。それから、まあ、いいと思った。外へ出てからだって、別れることはできる。

雨が降りだしていた。ラヴィックは戸口のところで立ちどまった。

「きみはどっちの方角へいくんです？」おれはその反対の方角へ曲がってやろう、と彼は肚^{はら}をきめた。

「わからないわ。どっちだっていいの」

「じゃ、おうちはどこなんです？」

女はちらっと身ぶりをした。「わたし、あそこへはいけません！ いやです！ いやです！ そんなこと、できません！ あそこへはいやです！」

とつぜん、女の目は激しい恐怖にみたされた。けんかしたんだな、とラヴィックは思った。何かガチャンとやって、表へとびだす。あすの昼にでもなれば、もう一ど考えなおして、かえっていくんだ。

「だれか泊めてくれるようなひとはないんですか？ 知り合いかなにか？ ビストロで電話をかけたらいいますよ」

「いいえ、だれもないの」

「それにしても、どこかへいかなくちやならんでしょ。部屋代をもつてないんですか？」

「いいえ、もってます」

「じゃ、ホテルへいきなさい。この辺の裏街には、どこにでもありますよ」

女は返事をしなかった。

「でも、どこかへいかなくちやならんだろう」ラヴィックは、いらいらしながらいった。

「まさか雨の降る街に、いつまでもいるわけにもいくまい」

女は雨外套をかきよせた。「あなたのおっしゃるとおりですわ」と、女はとうとう決心がついたようにいった。「ほんとにおっしゃるとおりですわ。すみません。もうわたしのことはご心配なさらないで。どこかへまいりますわ。ありがとう」女は片手で外套の襟^{えり}をつまんだ。「いろいろすみませんでした」女はいかにもみじめなまなざしでラヴィックを下からみあげて、ちょっと笑おうとしたが、笑うことができなかった。それから、ためらいもせずに、霧雨の中を足音も立てずに立ち去った。

ラヴィックは、ちょっとの間、じっと立っていた。「ちえっ」と、面くらいながら、どっちとも決心しかねて、舌打ちした。いったいどうしてこんなことになったのか、またどうしたのか、さっぱりわからなかった。あの絶望

的な微笑のせいだろうか、それとも、あのまなざしだろうか、人気がない街だろうか、夜のためだろうか——ただわかつていることは、あの女をひとりぼっちでやってはならないということだった。向こうの霧の中をとぼあるいていく姿が、急に道に迷った子供のようにみえたからである。

彼は女のあとを追った。「いっしょにきたまえ」と、彼は素気なくいった。「どこかみつかるだろう」

ふたりはエトワールまできた。広場は、しとしと降る灰色の霧雨の中に、大きく、果てしもなくよこたわっていた。霧が濃くなっていて、広場から八方へわかれていく街路は、もうみわけがつかなかった。ただ果てしなくひろがる広場には、街燈の月があちこちにちらばって、薄ぼんやり光っていた。石のアーチは大きくそりたって、霧の中に姿を没し、さながら陰うつな大空をささえ、下の無名戦士の墓の、寂しい青白い炎をまもっているようだった。無名戦士の墓は、夜の闇と孤独の中に、人類の最後の墓のようにみえた。

ふたりは、広場を斜めによこぎった。ラヴィックは、さつさとあるいた。疲れすぎて、考えることもできなかつた。自分のわきには、頭を垂れ、両手を外套のポケットに深くうずめながら、小さな、みしらぬ生命の炎のように、黙ってついてくる女の、小刻みに歩くやさしい足

音が聞こえていた——すると、ふいに、夜ふけの広場の孤独の中で、女についてはなんにもしらないのに、あるいはかえってそのため、一瞬、この女が奇妙に自分の女のように思えた。彼は、どこへいっても赤の他人のような気がする。ちょうどそのように、この女も自分にとつては赤の他人である。ところが、そのことが奇妙なふうになり、いろんな言葉や、すりへらす「時」の習慣よりも、かえって女を彼にいつそうびったり近づけるように思えた。

ラヴィックは、テルヌ広場のそばの、ワグラム通りの横町にある、小さなホテルに住んでいた。相当いたんでいるあばら家で、たった一つ新しいのは、「オテル・アンテルナショナル」と書いた、入り口の上の門標だけだった。

彼はベルを鳴らした。「あいてる部屋があるかね？」彼はドアをあけた小僧に聞いた。

小僧は、寝ぼけまなこで彼をじろつとみた。それから、「門番さんはいませんよ」と、ついに口の中でもぐもぐいった。

「そんなことはわかってるよ。ぼくはきみに、あいてる部屋があるかどうか聞いてるんだ？」

小僧はしかたがないというように、肩をすぼめた。ラ

ヴィックが女をつれているのはわかったが、しかし、どうしてもう一つ部屋がいるのか。合点(がてん)がいかなかった。いままでの経験だと、もう一つ部屋を借りに女をつれこむなんて手はない。「マダムは眠ってるんですよ。へたに起こしたりなんかすると、つまみ出されてしまうんです」と、小僧はいつて、足でもう一方の足をごしごししかいた。

「よし、わかった。じゃ、自分で探してやろう」

ラヴィックは小僧にチップをやつて、自分の鍵(かぎ)をと、女の先にたつて階段をのぼつていった。そして、自分の部屋をあけるまえに、となりの部屋のドアをみてみた。ドアの外には、靴(くつ)はおいてなかった。二どノックしてみた。返事がなかった。彼はハンドルをそつと回してみた。ドアは錠(じよう)がおりていた。「昨日はこの部屋はあいてたんだが」と、彼はつづやいた。「一つ反対側からためてみよう。きつと女将(おかみ)のやつ、南京虫が逃げだすかと思つて、ドアの錠をおろしたんだらう」

彼は自分の部屋をあけた。「ちよつと腰をかけていくれたまえ」彼は馬の毛を詰めた赤いソファを指さした。「すぐもどつてくるから」

彼は窓の扉(とびら)をあけて、狭い鉄のバルコニーに出、境の柵(しき)をのり越えて、となりのバルコニーにわたり、扉をあけようとしてみた。が、これもおなじように錠がおりて

いた。彼はあきらめて、もどつてきた。「だめだ。ここにや一つも部屋はありませんよ」

女はソファのすみっこに腰かけていた。「わたし、ここにちよつとすわつていてもいいんでしょうか？」

ラヴィックは女を注意してみた。女の顔は、疲労のため、落ちくぼんでいた。もう立ちあがることもできないようなようすだった。「ここにいてもいいですよ」

「ほんのちよつとだけ——」

「ここで寝てもいいですよ。それが一ばんかんたんだ」女は彼のいったことを聞いているようではなかった。

ゆつくりと、まるで自動人形みたいに首をふつた。「あなたわたしを街でほつといてくださればよかったんです。いまとなつては——ほんとに、いまはもうとても——」

「ぼくだつてそうですよ。ここで泊まつて、寝たがいい。それが一ばんいい。明日になったら、またよくわかるだらう」

女は彼をみた。「わたし、けつしてあなたの——」

「とんでもない」と、ラヴィックはいった。「じゃまになんかなりませんよ。いくあてがなくて、ここに泊まるのは、なにもきみがはじめてじゃない。なにしろ、ここは避難民の住んでるホテルですからね。こんなことは、毎日ですよ。きみはベッドで寝なさい。ぼくはソファ

にするから。もうなれっこになつてゐるんだ」

「いいえ、いいえ——わたし、ここでけっこうです。ここにおらしていただければ、それでけっこうです」

「じゃ、いいでしょう。どちらでもお好きなように」

ラヴィックは外套がいのとうを脱いで、外套掛けにかけた。それから、毛布とクッションをベッドからとって、椅子を一つソファのわきへ押してやった。それから、浴室から化粧着をとってきて、椅子にかけた。「さあ」と、彼はいつた。「これだけのことしかしてあげられない。よかつたら、パジャマもあります。その引き出しの中にありますよ。ぼくはもうきみのことはかまいませんからね。いま浴室をつかったらどうです。ぼくはまだここでやることがあるから」

女は首をふった。

ラヴィックは女のまえにじつと立っていた。

「それにしても、外套は脱ぎましょうや」と、彼はいつた。「すっかりぬれてますよ。それから、帽子もよこしなさい」

女は両方とも彼にわたした。彼はソファのすみっこにクッションをおいた。「これが枕まくらです。この椅子は、きみが眠ってる間におっこちないためです」彼は椅子をソファにくつつけた。「こんどは靴くつだ、むろんびしゅぬれた。さっそく風邪かぜをひいてしまう」彼は靴を脱がせ

てやって、引き出しから短い毛糸の靴下をとりだして、それを女の足にはかせた。「さあ、これですこしはいいだろう。苦しいときには、すこしのことに慰めをみつけるようにしなくちゃいけない。古い兵隊の掟おきてですよ」

「すみません」と、女はいつた。「すみません」

ラヴィックは浴室へはいっていつて、水道の栓せんをひねった。水は洗面盤の中へどつとほとばしり出た。彼はネクタイを解いて、放心したように鏡の中の自分をみた。影の深い眼窩がんかの奥の、探るような目、死んだように疲れた細面の顔、ただ目だけが生きている。鼻から口もとへかけて走っている溝みぞにくらべて、あまりにもやさしすぎるくちびる——右の目の上には、長いぎざぎざの傷あとがあつて、その先は頭髮の中に消えている。

電話がリリリッとして鳴って、われにかえつた。「ちえっ」ちよつとの間、何もかも忘れてしまつていた。こんなふうに、すっかり冥想めいそうに沈みこんでいる瞬間がよくある。そうだ、となりの部屋にはまだ女がいるんだつた。「すぐいきます」と、彼は声をかけた。

「びっくりしたんですか？」彼は電話器をとりあげた。

「何？ そうさ。いいとも——そう——むろんだ——そう、そう——それでいい——ああ。どこへ？ よしきだ、すぐいく。熱いコーヒをね、濃いやつだ——そうだよ——」

彼はそつと受話器をおいて、ちょっとの間ソーファの腕に腰をおろしたまま、考えこんでいた。それから、「ぼくは出かねくちやならん」といった。「いまからすぐ」女はすぐさま立ちあがった。が、ちょっとよろめいて、椅子によりかかった。

「いけない、いけない——」一瞬、ラヴィックは、いかにも素直にすぐ応ずる女の態度に、心をうたれた。「きみはこのままここにいていいですよ。眠んなさい。ぼくは一時間か二時間、出てこなくちやならん。どのくらいかかるか、はっきりはわからんが。ほんとにこのままいるんですよ」

彼は外套を着た。ふとある考えが頭をかすめた。そして、すぐ忘れてしまった。この女は盗んだりなんかしやしない。そういうタイプの女じゃない。そういうタイプの女は、しりすぎるほどしっている。それに、盗むものもあまりない。

戸口までいったとき、女がたずねた。「わたし、あなたといっしょにいてはいけません？」

「そりゃだめですよ。ここにいらつしやい。いるものがあつたら、なんでも使いなさい。よかつたら、ベッドも。コニャックはあそこにおいてありますよ。じゃ、おやすみ——」

彼は背を向けて出ていこうとした。「あかりはつけた

ままにしておいてください」とつぜん、女は早口にいった。

ラヴィックはハンドルにかけた手を放した。「こわいの？」と、彼は聞いた。

女はうなずいた。

彼は鍵を指さした。「あとで鍵をかけてください。だが、鍵を鍵穴にさしたままにしとかないで。階下に合鍵があるから、ぼくはそれであけてはいれますよ」

女は首をふった。「そうじゃないの。ただあかりはつけたままにしておいてください」

「なるほど！」ラヴィックは女をじつとみた。「どっちみち消すつもりじゃなかったんだ。あかりはつけたままにしておきなさい。その気持ちはわかる。ぼくだってそういうときがありましたよ」

彼はアカシア街の角で、タクシーをひろった。

「ローリストーン街の十四番地までやってくれ——急いで！」

運転手はぐるっと回って、カルノー通りに曲がった。車がグランダルメー通りを横ぎるとき、ふたりのりの小型自動車は右のほうから疾走してきた。街路が雨にぬれて、つるつるしていなかったら、二台の自動車は衝突してしまつたらう。だが、ふたりのりの自動車はブレーキを

かけて、タクシーのラジエーターにぶつつかりそうになりながら、うしろの車輪を横すべりさせて、街路の中央にそれた。軽い車は、まるで回転木馬みたいにくるくる回った。小型のルノーで、眼鏡をかけ、黒の山高帽をかむった男が運転していた。一回りすること、男の白い怒った顔がちらちらとみえた。それから、車はさながら巨大な冥府の門のように、街路のかなたにそそりたっている凱旋門にむかつて止まった——小さな緑の甲虫みたいな。そしてその中から、青白い拳が夜の空をおびやかすようにつき出された。

タクシーの運転手はうしろをふりむいていった。「あんなやつって、みたことがありますか？」

「あるとも」と、ラヴィックはいった。

「だって、あんな帽子をかむったやつをですよ。あんな帽子をかむったやつが、どうしてこの夜ふけにあんなに車をつつ走らせなきゃならないんです？」

「向こうのほうが正しかったんだよ。大通りにいたのはあっちなんだからな。それをどうしてそんなに怒るんだ？」

「もちろん向こうが正しかったですよ。だから怒れるんです」

「もし向こうが間違ってたなら、きみはいたいどうするつもりだね？」

「やっぱり怒るでしょうな」

「きみは世の中を気楽に考えてるらしいね」

「あんなふうに怒るんじゃないかな」
「あんたはいい訳をいって、フォッシュ通りへ曲がった。」「運転手はいい訳をいって、フォッシュ通りへ曲がった。」「そんなにびっくりなさらなくともいいですよ」

「しやしないよ。だが、交差点はもっとゆっくりやってくれよ」

「そうするつもりだったんですよ。だが、いまいまいしことに、道に油が流れてやがったんです。ところでお客さまは、ひとに物をたずねておきながら、どうして返事をお聞きにならないのです？」

「疲れてるからだよ」と、ラヴィックはいらいらしながらこたえた。「夜だからだよ。それから、われわれは何かわからぬ風にそよぐ火花みたいなものだからといってもかまわん。とにかく車をやってくれ」

「それだと話は別ですよ」
「運転手は帽子に手をやって、ちよつと敬意を表した。」「それならわかります」

「それはそうと」と、ラヴィックは疑念が起こって聞いた。「きみはロシア人かね？」

「ちがいますよ。でも、お客さんを待つてる間に、いろんなものを読むんです」

今日はロシア人には運が悪い、とラヴィックは思った。そして、頭をうしろへもたせかけた。コーヒード。